

足関節の鏡視下手術

足関節の鏡視下手術は、1972年に渡辺により小関節鏡が開発されて以降臨床応用されはじめ、2000年代以降の機器や手術手技の進歩により、現在では足の外科医にとって必須のツールとなっています。一方、足の外科を専門としない医師にとっては、膝や肩関節の鏡視下手術ほど一般的になっているとはいええない現状があります。そこで本特集は、足関節の鏡視下手術のエキスパート達に、現在の最先端の知見を紹介いただくと共に、残された課題と未来展望について明らかにする目的で企画されました。

足関節鏡の歴史、現状とトピックスについては、足関節鏡視下手術に精通され多くの著書や論文を執筆されている吉村一朗先生に解説いただきました。

足関節前方・後方インピンジメント症候群は最も古くから関節鏡視下手術の対象とされてきた疾患です。本術式について多くの経験をお持ちである神崎至幸先生には、一般的な術式とご自身の推奨する術式について論述いただきました。

関節鏡視下靭帯に対する鏡視下手術は、この数年で最も進化した領域であり、国際的にも大いに注目されている分野です。田中博史先生には、これまで報告された各術式の利点と欠点、さらにご自身の推奨する術式について論述いただきました。片倉麻衣先生には Arthroscopic Broström repair と Gould augmentation の手技について、松井健太郎先生には解剖学的な靭帯再建術である AntiRoLL 法について詳しく解説いただきました。

足関節軟骨損傷は関節鏡視下手術の良い適応とされていますが、gold standard は確立されておらず、治療に難渋する例もしばしば遭遇します。そこで、本分野について基礎研究から臨床研究に至るまで多くの経験と知識をお持ちの中佐智幸先生に、関節鏡視下手術の利点と欠点および未来展望について論述いただきました。

距骨下関節鏡は、関節鏡の初心者には難しい手技ですが、習熟すれば非常に有益なツールとなります。そこで、本手技に精通されている野口幸志先生に、距骨下関節鏡を行うべき後足部疾患と手術手技について解説いただきました。

腓骨鏡視下手術については近年多くの英文論文が発表されており、今後の発展が期待されている分野です。西村明展先生には腓骨筋腱脱臼に対する鏡視下手術について、小川真人先生には腓骨筋腱以外の腓骨鏡視下手術について、最先端の知見を含めて論述いただきました。

足底腱膜炎に対する鏡視下手術は、保存療法で治癒に至らない例に対して良好な術後成績が期待できる手技です。安井洋一先生には、本手技のコツについて解説いただきました。

いずれの項目も新進気鋭の先生方による力作で、多くの最新の知見が盛り込まれており、読み応えのある内容となっています。本特集が日常診療のみでなく、足関節の鏡視下手術の進歩に寄与することを祈念いたします。

(高尾昌人)